

◇江戸遺跡研究会第104回例会は、2006年3月15日(水)午後6時30分より東京文化会館中会議室に◇
◇で行われ、鈴木啓介・池田悦夫氏より、以下の内容が報告されました。◇

文京区内における江戸遺跡の様相

— 2004年度・2005年度の調査事例から —

鈴木啓介 池田悦夫

(文京区教育委員会)

1. はじめに

2004・2005年度に発掘調査が行われた文京区内の遺跡は15箇所を数え、縄文時代～江戸時代までの時期で調査成果が報告されつつある。ここでは2004・2005年度に発掘調査が行われた文京区内の遺跡の、近世における様相について概略・特記事項などを述べていくこととする。

2. 2005・2006年度の文京区内における調査事例

●千駄木三丁目南遺跡 [根津権現旧地]

・歴史的背景

本遺跡の敷地は延宝期には根津権現の敷地内と記されている。延享2年以降の「場末沿革図書」によると、この場所が「根津権現旧知」と記されている。宝永5年以降教法18年まで、当該地域は寛永寺の「千駄木御林」になり、その後江戸後期には「元根津」(移行してからの当該地)は百姓地としての性格を帯び、団子坂では町場化が進む(文献)

・調査成果

地下室2基、土坑12基、ピット14基、不明遺構5基。そのうち5号土坑が18世紀後半～19世紀台で、当該地域の土地利用がなされたのは18世紀後半である。根津権現との関連を示す遺構は見つからなかったが、後世の削平やあるいは主要部分から外れている可能性もある。だが、根津権現が移動して、当該地が寺社地とは異なった性格の遺構・遺物が検出されるようになるのが18世紀後半以降であるという部分は、当該地域の土地利用のあり方と整合するものと思われる。

●大塚窪町遺跡 [旗本大久保家3000石の拝領屋敷]

・歴史的背景

調査地点北側に水戸藩支藩の陸奥国守山藩松平家二万石(福島県)、上げ屋敷が接し、道路を挟んで南側には陸奥国磐城平藩安藤家の下屋敷が広がり、その周辺には旗本屋敷が配置

される武家地。

・調査成果

地下室、井戸跡、溝跡、溝状遺構、土蔵跡、埋桶、埋甕、袍衣埋納遺構、植栽痕、土坑、建物列などが検出されている。遺物は主に17世紀末～19世紀後葉にかけてのものが5万点あまり出土している。本遺跡の屋敷地としての利用の変遷は遺構・遺物の年代観、文献調査との関係から

I期(17世紀前～中葉): 斎藤三左衛文(I区)、高木守勝(II区)

II期(17世紀後葉～18世紀後葉): 旗本竹尾氏(I区)、高木守勝・旗本阿部氏(II区)

III期(18世紀末葉): 旗本永井氏(I区)、旗本猪飼氏(II区)

IV期(19世紀前葉～19世紀末葉): 旗本大久保氏(I区) 民部卿所持(II区)

と想定される。

・特記事項

「地下坑」が挙げられる。文京区内の白山4丁目遺跡にて初めて検出され、地下坑として紹介されたこの遺構は、縦坑(間口106cm×75cm、深さ5mから5.7m)が垂直に掘られ、その底部から複数の横坑(坑道)が延びていた。本遺跡で検出された入り口部は15基に及び、縦坑は互いに横坑により接続していることが一部確認された。これは旧窪町小学校建設時に偶然発見され、描かれた地下坑見取り図とも符合し、地下を縦横無尽に掘られていたことが確認された。詳しくは後述する。

●弓町遺跡第3・4・5地点【旗本御弓組の大縄組屋敷地・水野氏、内藤氏の屋敷地】

・歴史的背景

江戸時代の初期には旗本御弓組の大縄組屋敷地であり、18世紀以降は水野氏、内藤氏の屋敷地へと変遷した場所である武家や敷地への転機になったのは災害で、元禄16年(1703)十一月の火災がきっかけと考えられている。

・調査成果

第3地点 地下室・大型土坑7基、土坑・ピット48基、柱穴列6

第4地点 地下室1基、大型土坑2基、土坑10基、ピット20基、柱穴列3、溝2条

第5地点 地下室1基、大型土坑5基、上水遺構1条、上水井戸1基、植栽痕2基、土坑12基ピット40基

出土遺物全体的には第3地点は一般的な江戸遺跡と比較して、19世紀代の遺物が少ない。第4地点についても同様である。おおよそ17世紀末～18世紀前葉の遺物がメインである。遺跡の性格としては、第3地点では地下室や採土坑が点在していること等から、調査地が水野、内藤氏の屋敷の中心部や庭園部ではないと思われる。第4地点においても同様で、地下室や大型土坑が検出されているが、第3地点とは異なるのが、17世紀代の茶道具・花器と

いった瀟洒品、優品が多く、雑記が少ない 006 号遺構がある。これが御弓組時代に帰属するのか、水野氏時代の搬入品なのかは、検討の余地を残している。

第 5 地点は 17 世紀後葉は土坑、大型土坑が散在している。18 世紀初頭になると、上水遺構や上水井戸も構築されるが、罹災のためか、廃棄される。18 世紀後はでは廃棄のための遺構とされているが、出土遺物が少ないため、詳細は不明。18 世紀後～ 19 世紀中葉の時期はごみ穴が多く出現、廃棄の場として利用されていた。

●金富町北遺跡 [旗本戸田家の屋敷地裏手]

・歴史的背景

18 世紀初頭までは大名屋敷地、その後分割して旗本屋敷地として利用されていたことが文献調査により知られている。大名屋敷期は越前丸岡藩本多家、若狭小浜藩酒井家が拝領、上げ屋敷として利用していた。調査地はその南東隅に当たる。その後大名屋敷地は分割されて、当該地は戸田家が拝領し、幕末まで居住。

調査区の位置を推定するため、「屋敷割り復元図」が作成されている。(正徳 5 年～享保元年 (1715～1716) の『御府内往還其外沿革図書』、及び明治 6 年の「東京大四大区沽券地図」に示されている区画を明示 16 年 (1883) の「東京実測量原図」とあわせ、さらに現在の文京区住宅地図に重ねたもの) これによると調査地は間口から未定、いずれの時期も屋敷地の右手奥に当たる。結果として、調査区は大名屋敷期、旗本屋敷期ともに裏手にあたる。

・調査成果

井戸跡 1 基 埋甕 2 基 土坑 76 基 ピット 57 基

盛土→近世のものは、遺構とのきり合いから見て、旗本戸田家屋敷期より前に施工されている可能背が高い。

調査で検出された遺構のうち、廃絶年代を推定しえたものは 8 基。いずれも土坑である。また出土遺物から判断すると 17 世紀以前まで遡ることができない。すなわち、検出された遺構はすべて、戸田家拝領期に廃絶したことになる。

●真砂町遺跡第 6 地点

・歴史的背景

本調査地点は、江戸時代の武家屋敷跡を主体とする遺跡である。江戸時代初期から元禄 16 年 (1703) までは御先手弓粗大縄地であった。同年の大火後に収公され、火除明地となったものの、翌年の宝永元年 (1704) には大名・小笠原家に中屋敷として下賜される。その後、安政 5 年 (1858) にこの中屋敷は上地されて、大名・松平家が中屋敷 (当初は上屋敷) として拝領し、幕末に至る。両大名家は、ともに老中職など幕府の要職を務めた家柄である。

・調査成果

地下室 7 基、土坑 46 基、井戸 2 基、道路状遺構 1 基、溝状遺構 5 条、礎石 12 基、植栽痕 6 基、ピット 134 期、(うち柱穴列 2 列)、正確不明 1 基。

地下室・採土坑といった大型のものが目立ち、また屋敷内の通路に使用されたものか、道路状の遺構も検出されている。出土遺物は、17 世紀初・前葉から 19 世紀中・後葉まで、ほぼ江戸時代を通して遺存状態の良好な遺物がみられる。このうち、17 世紀末葉から 18 世紀初頭に帰属する遺物には、火災によるものと思われる被熱の痕跡が残るものが比較的多く、地下室から多量の焼土とともに纏まって出土したのもあった。遺物の帰属時期から上記の火災後の一括廃棄の可能性が考えられる資料といえる。しかし、採土坑をはじめ、多くの遺構の出土遺物の帰属は年代幅が広く、一時期に纏まって廃棄されたものではない可能性が高い。これらの遺構と遺物の検出状況と、北側に急激な傾斜地を控えている調査地点の立地条件からも、ほぼ江戸時代を通して、屋敷の裏手に位置していたものと思われる。

●動坂遺跡第 3 地点 [縄文時代中期]

縄文時代中期、幕末の遺構・遺物が検出された。調査面積が狭く、出土遺物量もそれほど多くはない。

●三軒町遺跡 (整理作業中)

●小石川二丁目北遺跡

・歴史的背景

本遺跡は傳通院の正門前参道に位置し、「無量山境内大絵図」によると付近の地割りや道路のあり方、地勢的な変更は現在と大きく変更しておらず、傳通院の学寮と想定される範囲として考えられる。

・調査成果

地下室 1 基、土坑 4 基

出土資料は主に地下室から出土したもので 18 世紀前葉～ 19 世紀前葉までの時期幅がある。傳通院成立期に帰属する遺物はほとんど見られず、出土資料に完形のものが多いことも鑑みて、学寮制廃止に伴い寮社撤去の際に一括廃棄された可能性が想定される。

●戸崎町遺跡

・歴史的背景

調査地点は大多喜藩松平(大河内)家の中屋敷があったとされる場所である。北側に白山御殿町遺跡があり、そこは上州館林藩主松平徳松、後の五代将軍徳川綱吉の屋敷地の一部とされている。

・調査成果

建物跡、張床状遺構、土坑

包含層中から近世の遺物が少量検出されているが、遺構に伴う出土は認められていない。建物跡と思われるピットの列が検出されているが、調査範囲の制約上、その明らかにできなかった。

●春日町遺跡第9地点

・歴史的背景

調査地点周辺は近隣に庭園「後楽園」を初めとして水戸藩徳川家を中心とした武家屋敷や寺社地が数多く分布している。水戸・徳川家の拝領屋敷から神田川へ通ずる、水戸藩邸小石川御門～後楽園庭園の入堀として想定されている地域である。調査地点北側の小石川後楽園から流れる水路が神田川へ注ぐその中途の地点である。

・調査成果

盛土跡、石垣

本遺跡は小石川の水戸徳川家の居屋敷が存在しており、その中の庭園から神田川へ注ぐ水路があったといわれている。居屋敷に出入りする船などもあったと思われ、将軍家光の御成の時には小石川御門で小船に乗り換え、庭に乗り入れたという。絵図資料には神田川と後楽園庭園を結ぶ水路が描かれており、そこに橋が2本架かっていたため、その関連施設と考えていたが、石垣の構築のあり方からいくつかの時期に渡って改築されている可能性があり、橋脚として利用された部分については、幕末近くで再構築されたものと考えられる。

もっとも古い段階では、本調査区においてL字型を呈した部分を基軸としている。石垣も割rippばなしで大型のことが多い。石垣の下の胴木は丸太を用いている。L字型の東西にかかる部分は、一番東側では石垣が途切れていて、そこにはしがらみを使った土留めや地盤改良に用いたものと思われる土俵が検出されており、その下の層は自然堆積層であった。土俵が検出されたMAXの西側にはやや小ぶりの石垣が南北に渡って伸び、あたかも荷揚げのための舟入としての機能を想起させる。

次の段階ではこのL字型の石垣にさらに継ぎ足すようにしてL字型の南北に伸びている石垣の途中から、やや角度を違えて東西に伸びる石垣が構築されている。これは形態などを鑑みるに、橋台部分に当たるものではなかろうか。この石垣の胴木は角材が使用されており、L字を呈している石垣の胴木とは様相が異なっている。しかしながらこれらの石垣の時期を裏付けるような遺物の出土は認められず、石垣の形態とそのあり方から様相を推定しているに過ぎないが。

●駒込浅嘉町遺跡第3地点（整理作業中）

●春日町遺跡第10地点（整理作業中）

●駒込浅嘉町遺跡第4地点（整理作業中）

3. 特徴的な遺構

「地下坑」

地下坑について一大塚窪町遺跡の例から—

文京区において、特筆される遺構として「地下坑」が挙げられる。「地下坑」とは90cmかける60cmの開口部から垂直に作られた直方体の縦坑と縦坑の底部から一方、もしくは複数方向に伸びる高さ60cm～120センチ、幅90cm前後の横坑からなる形状を持つ遺構で、縦坑の深さは5m以上に及ぶものである。現在報告例は文京区以外ではほとんど無い。区内では白山四丁目遺跡、原町遺跡第1地点、小石川御薬園跡・消防庁防火水槽（原町遺跡第Ⅱ地点）、小石川御薬園跡・東京大学理学系研究科付属小石川植物園研究温室地点、林町遺跡第Ⅱ地点、指ヶ谷町遺跡、一行院跡（原町遺跡第Ⅵ地点）、林町遺跡第1地点、2005年6月に調査された三軒町遺跡などで検出されている。

この地下坑で捉えられている特長は、

- ・ 縦坑には40～50cmの間隔で壁面に足掛け穴がある。
- ・ 横坑の壁面には灯かり置きのためと思われるくぼみが設置
- ・ 壁面及び床面は丁寧に整形され、凹凸は無いが、天井には工具痕が明瞭に残されている。
- ・ 点上部は整形されていないがほぼ平ら。ドーム状を呈していない。
- ・ 横坑の高さは方向によっては高さが異なる。
- ・ 横坑の高さは60cmのものから120センチ程度のものまでであるが、横幅は90cm前後である。
- ・ 地下坑の地下部分に部屋上の空間は確認されていない。

地下坑から出土した遺物について、横坑から発見されたものは木製の下駄1点である。

縦坑からは遺物の出土が多く認められているが、縦坑が廃棄された年代と利用されていた年代はズレが生じる可能性が高いため、参考程度であろうか。

大塚窪町遺跡の考察中では、地下坑の縦坑から出土した遺物の時期や、切り合い関係などから19世紀中葉～後葉のものとして捉えられている。これは旗本大久保家が拝領時のものである。

この地下坑についてはいくつかの機能が想定されている。

- ・ 農業説
- ・ 粘土採掘坑説
- ・ 江戸の抜け穴説
- ・ 火事の際の脱出坑説
- ・ 宗教関係説
- ・ 上下水施設説

などの想定がなされているが、機能や用途を類推する決め手に欠けており、現在でもそのあり方は分かっていない。大塚窪町の報告では大枠で捉えて、「地下道」的なものとして位置づけている。

4. おわりに

今回の発表は文京区内の調査事例の紹介という性格が強いため、発表・原稿ともに取り留めのないものになってしまったが、こういった調査成果は例えば遺物・遺構などの「静的」な考古資料を、より高位の歴史叙述を目ざして絵図や文献などの資料とあわせて検討することまでは行われている。今後の調査成果に期待しながら、さらに高位のより「動的」な歴史像を復元していくための視点・作業・意識が肝要となっていくであろう。

【参考文献】

- 石川 郁 2005 『金富町遺跡』 岡三リビック株式会社
今野和浩他 2005 『大塚窪町遺跡』 加藤建設株式会社
加藤元信 1992 「地下坑について」『本富士町遺跡』文京区遺跡調査会
加藤元信 1995 「地下坑について」『原町遺跡』徳島県総務部・文京区遺跡調査会
加藤元信 1996 「調査成果と問題点」『原町遺跡第Ⅱ地点』東京消防庁・文京区遺跡調査会
加藤元信 1998 「調査成果と問題点」『指ヶ谷町遺跡』文京区遺跡調査会
鈴木康好他 2005 『真砂町遺跡第6地点』加藤建設株式会社
東野豊秋 2005 『動坂遺跡第3地点』テイケイトレード株式会社
鈴木裕子他 2005 『弓町遺跡第5地点』株式会社 四門文化財事業部
玉木博史他 2005 『金富町期待遺跡』岡三リビック株式会社
西股総生他 2005 『弓町遺跡第3地点』株式会社武蔵文化財研究所
西股総生他 2005 『弓町遺跡第4地点』株式会社武蔵文化財研究所
西脇俊朗 2006 『春日町遺跡第9地点』共和開発株式会社
福田智子 1981 「地下坑跡」『白山四丁目遺跡』白山四丁目遺跡調査会
横山太郎他 2005 『千駄木三丁目南遺跡』 共和開発株式会社
依田賢二 2006 『小石川二丁目北遺跡』 武蔵文化財研究所 文京区教育委員会
依田賢二 2006 『戸崎町遺跡』 武蔵文化財研究所